



私の思い出写真館

ぼうちゅうかんあり

忙中閑有



内山 英世

あずさ監査法人 理事長
KPMG ジャパン CEO

あずさ監査法人は、その前身法人時代の1988年からニューヨークを拠点とするオルフェウス室内管弦楽団の日本公演を協賛しており、日ごろお付き合いのある方々と演奏を楽しませていただいている。また、2011年から昨年までKPMGのアジア太平洋地域チェアマンに就任したこともあり、アジアのみならず世界各国の音楽に触れ親しむ機会を得た関係で、近年は特にクラシック音楽に関心を抱くようになった。

ただ、クラシックの重厚かつ華やかな音も素晴らしいが、とりわけ海外滞在中は邦楽の持つ素朴かつ緩やかなテンポが無性に恋しくなることがある。洋食より、やはり白米とみそ汁とおしんこが日本人には合うね、という実感である。歌唱法の違いうんぬんを講釈するほどの知識はないが、日本に根付いた楽曲は十分世界に通用するものだと思う。

20代のころから「謡」^{うたい}を習わされた。父親は明治41年生まれ、母親は大正6年生まれという環境で育ったゆえんか、親からの「将来社会人になったときには、日本人として何か一つくらい文化的素養を身に付けるべし」という教育方針に従うものである。



師匠である柴田稔先生主催の
発表会での一コマ(右端が筆者)

2008年10月26日
華友会大会
演目:
竹生島(ちくぶじま)



2007年7月頃 別の発表会での一コマ(中央が筆者)

鎌仙会能楽研修所(南青山)

ご近所にいた観世流のお師匠さんについて「お上手」とか「筋がいい」とおだてられながら足のしびれと闘い、もっぱら「素謡」^{すうたい}を繰り返し、そこそこ難しいといわれる準九番(伝授の順序をさす能楽用語)あたりまでを習うことができた。途中、「仕舞も」とトライしたこともあったが素質のなさに気付き、こちらは早々と断念した。その後、ご多分に漏れず「働き盛り」となり、公私ともどもの忙しさゆえに自然とその道から離れてしまった。

50代になり観世流能楽師の柴田稔先生に知遇を得、「昔取ったきねづか」とばかり恐る恐る再開することとしたが、2010年の監査法人理事長就任を契機として残念ながらこちらも現在中断している。

そのほか、小唄などもかじったが、監査法人退職後に「謡曲」とともに実は一番挑戦してみたいのが「民謡」である。とりわけ「江差追分」に関心がある。独特の節回しの難しさは謡曲でいう「熊野松風^{ゆやまつかぜ}に米の飯」と相通じるものがあり、この歌の持つ心情に心を通わせることができるのはいつの日だろうかと思う。いずれもこれからの挑戦目標として大事にしたいと思っている。